

吃音の子 ありのままできて

写真は朝日7日夕刊。リードから一言言葉をうまく出せない吃音の子どもたちを紹介した米国のドキュメンタリー映画を、日本でも広めたいと奮闘する当事者の女性がいる。映画の子どもたちと同じようにつらい体験をしてきた。いま、下を向いている子に伝えたいのは、「吃音があっても大丈夫」とのメッセージだ。

「私はこの映画に感銘を受けました。日本でも広めたいと思っています」

東京都目黒区の奥村安莉沙さん(29)は3月、映画「マイ・ビューティフル・スタッター」(90分)を撮った米国の小さな制作会社にメールを送った。吃音のせいでいじめられた子や、殻に閉



じこもっていた子が、自助団体のキャンプで「吃音があっても大丈夫」という考えに出会い、希望を取り戻していく実録。SNSで予告編を目にし、日本語字幕の翻訳ボランティアに手を挙げた。

映画に登場する子どもたちはかつての自分だ。自らも重い吃音とともに生きてきた。「安莉沙ちゃんとはもう遊べないよ」。小学3年のとき、友だちから突然告げられた。「しゃべり方がうつるから、お母さんが遊んじゃダメって」数日前にあった授業参観。教科書を音読しようとして「あ、あ、あ」と言葉を連発した。「触ったらうつる」と、友だちから避けられるようになった。進級や進学のために自己紹介が苦痛だった。名前を言おうとすると言葉に詰まり、しびれを切らした級友から丸めたプリントや消しゴムが飛んできた。「自分が惨めでした」

この記事が目にとまったのは、私も幼い頃から吃音(当時ほどもりと言っていた)に悩まされたからだ。奥村さんと同じ経験をしたことがある。小学1、2年生だと思うが、近所の親しいおばちゃんが「明ちゃんと遊ぶと、どもりがうつるから遊んじゃいけない」と言っているのが聞こえてきた。なんだか悲しくなり、自宅の押し入れに閉じこもり、泣き続けたことがある。いまでも鮮明に覚えている。いじめこそ、どもりの真似をされるぐらいだったが、国語の音読の時間などは辛かった。

できるだけ吃音のことを気にしないように、学校生活を送るようにした。高校の頃には、クラスで落語めいたことを披露したこともある。いまでも寒いダジャレにつながる、人を笑わすのが好きだった。大学では閉じこもりの生活から一転して、デモの「かけ声」役を演じるようになった。そして運よく、大学の教師を35年も勤めることもできた。

記事タイトルのように、「吃音の子 ありのままできて」と私からも言いたい。

(2021年9月9日)